

No. 396【2020年2月28日配信】

縄文遺跡とコクゾウムシ (担当: 児玉)

こんにちは。文化財課の児玉です。数年前の蒸し暑い夏の日のことですが、自宅の居間に 3 ミリ程度の虫が数匹歩いているのを見つけ、辿ってみると処分し忘れていた古いお米に、大量の虫が湧いてびっくりした経験があります。虫の正体は、象の鼻のように伸びた口が特徴的な小型の甲虫「コクゾウムシ」でした。漢字では「穀象虫」と書き、穀物に発生するゾウムシという意味で、「米食い虫」とも呼ばれています。

コクゾウムシは、長い口を使って器用に米に穴をあけ、卵を産みつけていき、その中で孵化した幼虫が成長してサナギとなり、成虫となって外に出てきます。15 度以下の温度では繁殖せず、25～30 度の場合で、産卵から成虫の出現まで 1 ヶ月ほどかかるようです。28 度が繁殖にもっとも好適とされており、我が家の大繁殖の時も、このくらいの室内温度だったと思います。

コクゾウムシは、世界各地に生息しており、米だけではなく小麦やトウモロコシなど様々な穀物に発生するため、貯蔵穀物の害虫として広く知られています。

このように世界的に害虫扱いされているコクゾウムシですが、文化財保護の分野では害虫ではありません。彫刻や古文書、衣類などの文化財を様々な虫から守るための殺虫処理を実施する際、その効果の有無を判定するための供試虫（テストサンプル）として使われています。万一、施設内でコクゾウムシが逃亡した場合でも文化財に加害しないことから、殺虫処理判定に活用されているのです。

日本では、朝鮮半島から伝来した稲作とともに侵入したと考えられてきましたが、近年では、米の存在が確認されていない縄文時代中期（約 5,000 年前）の三内丸山遺跡からコクゾウムシの生体化石のほか、土器の表面などに紛れ込んだ痕跡（^{あっこん}圧痕）が見つかりました。

このようなことから、稲作伝来と大幅にかけ離れた時期・地域で製作された縄文土器に圧痕として残るコクゾウムシは、米からではなく、縄文人が採取したクリやドングリのような堅果類（^{けんかるい}）などから発生した可能性が考えられるようになりました。

さらに、北海道の^{たてさき}館崎遺跡から出土した縄文時代後期（約 4,000 年前）の 1 個体の土器から、約 400 匹ものコクゾウムシの痕跡（土器表面の圧痕や X 線 CT スキャナーによる確認）が発見されました。これだけの量のコクゾウムシですから、粘土を練り込んでいる最中に偶然、混入したとは考えにくく、縄文人が意図的にコクゾウムシを入れていたと推察されます。その理由としては「縄文人が食料にしていたクリの豊作祈願などのため」であったり、逆に「大切な食料を^{けんかるい}食べられて、悔しくて粘土に練り込んだ」という意見がありますが、実際のところはよくわかりません。